

■『論考』から『探求』へ
■スマホのない生活は考えられない
■幸せになりたいのなら飲みなさい
■古代インドの統一を目指す物語

『論考』から『探求』への大転換は

どのようなことに起こったか

哲学に興味がなくても、ウイットゲンシュタインの名前は知っている、という人は多いのでは。生前唯一の出版物にして主著『論理哲学論考』の最後に、「語りえぬものについて沈黙せねばならない」と書きつけて、すべての哲学的問題は解かれたとみなし、三十歳で隠遁した、現在の言葉で言うところのレジエンド。格好いいです。

ものを浮き彫りにするとともに、「倫理・価値・生に関わることは沈黙とともに受け入れよう」とする。これにより従来の哲学的問題（例えば、世界は何故あるのか？私とは？死とは何？のような）に終止符が打たれる（語れないものを語ろうとするのは意味をなさない命題の集合に墮すしかない）。

『論考』自体もレジエンド級にユニークなスタイルを持つ。六つの命題（以下野矢茂樹訳。「世界は成立していることがらの総体である」「成立していることがら、すなわち事実とは、諸事態の成立である」「事実の論理像が思考である」「思考とは有意義な命題である」「命題は要素命題の真理関数である」「真理関数の一般形式はこうである。『p・q』(p,q)とそれらの補助命題に、前出の「語りえぬ…」の七つ目の命題が付け加わって、さっと幕が引かれる。実にクール！

しかし、本当にそうか？ウイットゲンシュタインが依って立った論理や言語もまた語ることができないのではないか。自身『論考』六・五四で「私を理解する人は、私の命題を通り抜け、その上に立ち、それを乗り越え、最後にそれがナンセンスであると気づく。(略)私の諸命題を葬り去ること。そのとき世界を正しく見るだろう」と記しています。

「私にはどれだけのことが考えられるのか」を言語の限界を明らかにすることによって示し、思考しえぬ

ウイットゲンシュタインは考え続けます。そして、その思考は『論考』とは内容・方法・文体において全く対照的な『哲学探究』としてまとめられていきます。『探求』で著名なのは「言語ゲーム」。『論考』では言語の全体像が想定されていたが、日常において他の人との言葉のやりとり

我々は過渡期にいる

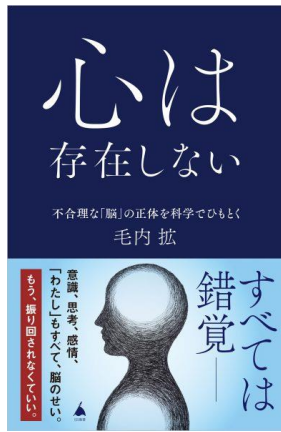
人類の歴史上、多くの哲学者や思想家が、「心とは何か？」について思索をしてきました。そして、近年の脳科学の急速な発展により、心の謎が、かなり解明されてきています。心とは、脳の働きが作り出した幻想であり、その意味では『心は存在しない』ということが結論のようです。

味気ない話ですが、へ心の役割（つまり脳の役割の一つ）は、変化に対するストレスに対処して、体の恒常性を維持することです。喜怒哀楽に対して脳の特定部位が活性化し、身体に心拍数を上昇させるなどの指令を出しているのです。いずれは、脳の機能（心の働きを含む）も全て数式で表せるようになるでしょう。

そういった最新の見地を踏まえれば、必要以上に人生について考えたり悩んだりしても仕方が無いのかも知れません。脳が、我々の体の為にそうしているのですから。そういうものだと思えばいい。少しは楽になります。とは言え、二〇二五年時点で、脳科学も複雑な脳の機能や構造の全てを説明できていないわけはありません。これが二十年後だと分かりませんが、今は過渡期で、不安定な状態に



Ludwig Wittgenstein



放り出されているとも言えます。脳を知ることによって世界は急速に変わろうとしています。一方で、科学だけで人の悩みに対処できる時代ではまだなく、哲学、心理学などの発展が必要であり、宗教やスピリチュアルによる癒しをまだまだ必要としているというのが現状なのでしよう。

歴史は過去ではなく

現代に続いている

「三国志」には根強いファンが多く中国史に興味を持つ入り口のように感じます。またコミックの『キングダム』で秦の中国統一の過程に心躍らせて連載を楽しみにしている人は多いのではないのでしょうか。最近翻訳ものも多くあり、中華圏の文学に触れる機会が増えてよい時代だと感じます。

翻って現代中国に対してどうなのかとなると、親しみを感じないと

いう人が多いと「外交に関する世論調査」を引き合いに『中国ぎらいのための中国史』では語られます。私自身唐代に興味はあるものの、現代中国は何か威圧的な国だなどという印象を持っています。親しみを感じない国の古典をエンターテインメントとして大いに楽しんでいることに違和感を感じていました。これは古典の世界の中国と現代の中国を別物としているからだと著者は説明します。この辺りになるほどと思います。

歴史や古典など知ったところで現在生きていく上で必要ないという考え方もありますが、中国の人にとって古典は自身の過去であり、その過去は現代と深くつながっているようです。中国が政策を進めるうえで始皇帝の国家統一を台湾統一、鄭和の大航海を「鉄道」や「カメラ」など、最初期の発明から現代までの進化の流れなども知ることができません。中でも「電話」は、自分が生きてきた範囲だけでも、「固定電話」から「公衆電話」、個人向けに「ポケベル」から「携帯電話」、そしてスマートフォンへと進化し、それに伴って生活の仕方も大きく変わってきたと感じます。



スマホのない生活は考えられない



世界に大きな影響を与えた三大発明「羅針盤」「活版印刷」「火薬」。これら以外にも世界の歴史を変えた発明は数多く存在します。

『発明が変えた世界史』では、古代から現代までの様々な発明・発見が年代別にまとめられており、「鉄道」や「カメラ」など、初期の発明から現代までの進化の流れなども知ることができません。中でも「電話」は、自分が生きてきた範囲だけでも、「固定電話」から「公衆電話」、個人向けに「ポケベル」から「携帯電話」、そしてスマートフォンへと進化し、それに伴って生活の仕方も大きく変わってきたと感じます。

また現在進行形で進化しているテクノロジーとして「人工知能」や「自動運転技術」などが取り上げられていますが、近いうちに世界の変化についていけなくなりそ

うな気がします。この本はあくまで入門的な内容ですが、最新技術を理解する一歩目には良い内容だと思います。ちなみに日本三大発明は「二股ソケット」「ゴム足袋」「亀の子たわし」らしいですが、何だか生活感あふれるラインナップですね。

胡椒以外の

香辛料つて

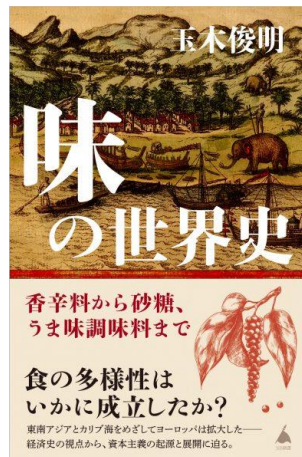
うまく使えない。

糖にまつわる貿易は「ヨーロッパ人がほぼ独力で実現したこと」であり、奴隷移民や工業化が関わってくる。イギリスが国際的な覇権を取るに至った理由の一つであるこの流れは、戦争や国家の盛衰からの視点や、産業革命以後の工業的な視点で見ると世界史とはまた違う趣がある。

食にまつわる世界史の変遷の面白いところは、それが「味」という、趣味嗜好が起因である点だろう。

香辛料は保存料としての側面も強いが、本書では味の好みの側面についても触れられている。それが砂糖に取って代わられる理由など、おどろくほどチープだ。よくよく考えてみると、ヨーロッパ諸国で愛される紅茶も珈琲もチョコレート（カカオ）も、ヨーロッパでは採れない食物である。世界の変革が「食の好み」で引き起こされるとは、いやはや、人間の欲望は恐ろしい。

さて我が国日本は、香辛料を求める貿易はあまりしてこなかったようだ。ところが現代では、他国から大量の食品を輸入し、外洋で魚を獲りまくっている。その点には別の懸念を抱きつつ、食にまつわる長い歴史を思いながら、日本風にアレンジした他国料理をいただくと思う。



インフォグラフィックで

理解する

私たちの脳は情報の七十パーセントを視覚から得ています。絵で表現された物はわずか千分の十三秒、なんとまばたきの八倍のスピードで見分けることができます。

『図解ジオ・ヒストリア』や『ブリタニカ ビジュアル大図鑑』は、そういった人間の視覚に訴えることでひと目で情報が分かるデザインになっていきます。日本と世界の出来事を並記した年表をつけたり、見開きを活用しカラフルな絵や図でデータをまとめることで、直感的に理解することができるので、数字や文字だらけの本が苦手な方にもおすすめです。

昨年の能登半島地震から始まり、南海トラフ地震や富士山噴火関連の書籍が増えているのを日々目にしている。「火山と寒冷化」「気候変動」「小氷期」の章に自然と目がとまりました。ほぼ同時代に起こった天明の大飢饉もフランス革命も火山の噴火による洪水や寒冷化で

作物が不作になったことが発端でした。

デジタルを使った学びもとても早く便利ですが、こういったインフォグラフィックを活用した本を自分のペースで頁をめくりながら読むことで、じっくりと考える時間が生まれます。お子様と一緒に眺めれば会話もはずむのではないのでしょうか。

アナログな紙、本の楽しみ方は大人も子どもも損なわないでいたい、と思いました。



幸せに

なりたいたいのなら、

飲みなさい

あまり酒には強くない。すぐに顔が赤くなる質だ。べろべろに酔っぱらうことはないので、間違つて隣の家を訪ねることはない。現代医学では多量の酒は体によくはないという。

WHOは酒に安全な量は無いと言いつつ、完全に悪者にしていない。妊婦は少量の飲酒でも胎児に影響があるとされている。

世界的に極無名。ウィキペディアにも記載がない。ある一冊の学術書で触れられているだけ。おもしろいのは一日中、酒を飲んでいるということ。エチオピアのデラシヤ人だ。

『酒を主食とする人々』はこの酒飲み民族にたどり着くまでの紀行文。デラシヤに行く前に、コンソというところによるのだが、そこであることが行われる。取材する側が行う場合が多いのだが、取材される側が自発的に行っており読者も苦笑するしかないだろう。

デラシヤの人は老若男女問わず飲む。「パルシヨータ」というアルコール度数四パーセント程の酒を朝から晩まで飲む。小学生くらいの子どもが持っているペットボトルの中身も酒。しかも固形物はあまり摂取しない。ノンアルコールの飲料さえほとんど飲まない。日本で飲酒しながら働くという事はほとんどないだろうが、デラシヤにおいては飲酒労働が日常風景。そして勤勉に働く。酒を飲むことも休まずに。病院にいる妊婦のベッド横にも酒がある。入院中の食事が酒。デラシヤの人たちは生まれる前から酒を飲んでいけるのだ。

デラシヤ人の不健康具合が想像できるかもしれないが、驚くべきこと

とに極めて健康的。肝疾患、高血圧、糖尿病がデラシヤ人に多いというデータは存在しない。子どもの栄養失調も見当たらない。男女ともに筋肉質。昔より今の方がアルコールの摂取量は増えているにもかかわらず。現代医学に真つ向勝負を挑むこの心意気。それが日常であつて本人たちに自覚はないけれど。

酒好きには朗報だ。どんどん飲酒しよう。酒以外の摂取は厳禁。これからは朝昼晩と酒だけを飲み続ける飲酒健康法の時代だ。妄想はさておき、酒が世界を変える・・・かもしれない。



偉くない大人による

文化継承

『おじさん・おばさん論』は、一見エイジズムの本かと思いきや、そうではない。血縁関係の「おじ・おば論」である。いつの時代も親は子に、安定した職業についてほしいと願うもので

あるが、ままならないのも親子の常。この、まっすぐな道の横から手招き背中を押すのがおじさん・おばさんである。そしてこの「ナナメ」の関係は、後に西洋の名だたる芸術家や作家となるゴッホ、ストラヴィンスキー、マーク・トウエインなどの誕生に深く影響を及ぼしているようだ。

特にトルーマン・カポーティと「おばちゃん」の関係性は興味深く、この背景を踏まえて改めて『クリスマスの思い出』を読み返してみたいと思う。

第三章「おじさん・おばさん」○人」は庄巻。古典から中世の話まで端的に紹介されており、読んだことがない話はもとより、一度読んだ話でもまた読みたい、と読書熱が刺激される。



石井ゆかり以後

心が弱った時、つい、ふらつと読みたくなるのが占い本だった。そして、女子の嗜みとして星占いを読み続けた。私が生まれた時、太陽は牡羊座に

いたので、自分は牡羊座である。牡羊座というと、まっすぐな行動力が目置かれる、いつのまにかリーダーになる、好奇心旺盛で新しいものを恐れない、正義感が強くさっぱりとした活動的な表裏のない性格などと紹介されていたものだが、正直言って、誰のこと？だ。そうして女子限定の一般常識の範囲内で、年一回の星占い詣でを重ね、石井ゆかりにたどり着いた。

石井の文章は一般的な占いの文章とは全く違う。(八月は恋のチャンス！射手座・蟹座と相性が最高)などの文章は一切ない。エッセイは表現も内容も読み応え充分、哲学的と評されることもある。大好きな書き手だ。例えば最新刊の『星占いの時間』では、牡羊座にとつての正義を解説したそのすぐ後に「一方、天秤座の世界観では、正義は相対的で、天秤はゆらゆら揺れる」と続き、「正義はひとつではない」現実に対する牡羊座の態度について思うところを述べ、「正しさ」へ言及し、最後は牡羊座的正義についての所感で終わる。十二星座分のエッセイ十星や星座の話+周辺の話といろいろ楽しめる。

彼女のホロスコープ読解に機械的・辞書的解釈はない。そのように感じる。思うと語尾を結び、読者自身にどう感じるかを委ねてくる。(占いはあやしいもの、ある種の統計でもあり、イメージや印象の集合

である」と過去に書いていることや、文章全体を使って、自分の仕事・読者とも健全な距離を保とうとする姿勢に安心する。

ここまで書いて、では、占いを信じているのかという問いが残る。例えば健康情報だつて真偽が確認されていなくても適度に取り入れて、続けるかどうかは自分で決めるではないか？

石井ゆかり以後、自分にとって星占いは読むのが楽しみなエッセイであり、気ままに使う内観用ツールとなった。



星占いの時間・石井ゆかり

カケオくん

41

ヘミングウェイの新訳が次々に刊行されている。『老人と海』に至っては現在10種に近い訳が選べる幸福な状態だ。



Ernest "Papa" Hemingway

美文調を廃し、極限まで削ぎ落とした文章による短篇群は、今も燦然と輝いている。Use short sentences. Use short first paragraphs. Use vigorous English.

代表作『The Sun Also Rises』を読み返して、あることに気づいた。殺される理由は説明されぬが、八百長だとする。黒服の殺し屋二人がレストランでメネーについて駄弁っている。標的はホクサーといが、あてて...



タランティーノの『パルプ・フィクション』じゃん！ John Travolta Samuel L. Jackson



古代インドの統一を目指す物語

コミックは何のジャンルでも大体系好きですが、自分が全く知らない題材を読んでいる時が一番楽しんで読める気がします。古代インドの統一を目指す『ラージャ』を見つけた時は、知識がないからこそそのわくわく感がありました。

紀元前六世紀の「十六大国時代」で、唯一王を志すカウテイリヤが描かれます。そして、インドを史上初めて統一することになるチャンドラグプタとの出会いから物語が描かれます。

最初は敵として遭遇する二人ですが、自分の仲間を容赦ない策で葬る様を見てカウテイリヤに「俺の仲間になれ！」という場面はチャンドラの底知れなさを感じました。二人

の主人公はもちろんです。主要な登場人物は絵を見ただけで迫力を感じさせるところに惹きつけられました。二人が協力関係を結ぶために出会う奴隷商人サムランは、不気味さしか感じないデザインで登場するたびにゾクリとさせられます。

東邦遠征中のアレクサンドロス大王も描かれており、色々なつながりが描かれるところも見どころです。壮大なストーリーでしたが、残念ながら本作は三巻で完結。あとがきで『ラージャ』を描くに至った経緯を読むと、著者の次に描く物にも期待できると感じられ収穫が得られた作品でした。

寄席に行こう

唸りを聞こう

浪曲師、玉川太福をご存じだろうか。今年一月、新宿末廣亭で初の主

任（トリ）を勤めて話題になった。落語定席で浪曲師が主任を勤めるのは実に六十五年ぶり。寄席に新しい歴史が刻まれた。

そんな大福さんの著書、『玉川太福私浪曲 唸る身辺雑記』を読んだ。浪曲、しかも新作口演を活性化：それって面白いのか？という心配は御無用。ライブ音源をそのまま文字化しており、各ページのQRコードをスマホで読み取れば、すぐに太福さんの名調子が聴ける。寄席の熱気が玉手箱のように詰まった画期的な本なのである。

初めて寄席で浪曲を聞いたとき、迫力ある巧みな話芸はもちろんだ。曲師との阿吽の呼吸に圧倒された。曲師は浪曲師の節や啖呵、語りに合わせてアドリブで演奏して掛け声を入れていく。まさに名人芸。ジャズのセッションにも例えられるもの納得である。

太福さんの浪曲は、身近なネタを「泣き」と「笑い」が絶妙にブレンドされた芸に昇華させ、滋味深く、なんとも心地よい。思わず自分も唸りたくなってくる。活力が湧いてくる浪曲を是非本で、そして寄席で体験してほしい。

久しぶりの登場、待っていました！

画家・絵本作家のヒグチユウコをご存じの人も多いのではないだろうか。ローソンのコラボ商品を出

したり、新将棋会館の新設のクラウドファンディングの返礼品にキラクターを書きおろしたりと都度話題になる人気画家である。

そのヒグチユウコワールドのシンボリック存在「ギユスターヴくん」頭は猫、手はへび、足はタコの不思議なきものが主人公の絵本第二弾『ギユスターヴくん」とまぼろしのどうぶつ』が八年ぶりに発売された。

全部で十四匹いるギユスターヴくんは皆でまぼろしのどうぶつを捕獲するために森に向かう。その道中出会った奇妙な植物たち、まぼろしのどうぶつに出会ってからのギユスターヴくんたちの元来のいたずら好きな性質がもたえるほどに可愛らしい。また謎に包まれていたギユスターヴくんの生態も解説してあるところもファンにはたまらない一冊となっている。

今年へび年。ギユスターヴくんの手の年。この八年、日本以外でも原画展開催を行い、世界にも羽ばたいていったギユスターヴくんの原点回帰を是非とも堪能していただきたい。

